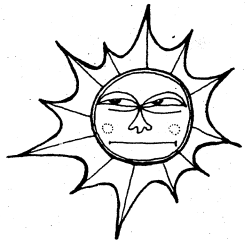
神　谷　恵理子

川瀬先生から原稿の依頼を受けたとき、引受るか否かを迷った。「離婚」という少々マイナーな事実に触れなくてはならないからだ。しかし、最近では芸能界だけでなく庶民の間でもそれ程珍しくはなくなったこと、熟年夫婦の間ですら稀ではなくなったという時代背景を鑑みて引き受けることとした。



私の人生の転機は、離婚ではなく、子供を生んだことである。今では死語となった「女はクリスマスケーキと同じで25過ぎたら価値は半分」を信じて25歳で結婚し、周囲の期待に応えるべく翌年出産し、その頃の企業の慣例に従って出産退職する。その時、それまでは考えなかった自分の将来について、子育てが落ち着いたら教員の資格を生かして学習塾でも開こうと具体的将来像を描いた。しかし、その後の家庭内不和、更には歩き始めたばかりの子供の怪我を機に別居したことから、働きに出ることを決意する。再就職を機にやり直しを考えて戻るが、出勤３日目にして子供が高熱を出す。子供の病気や怪我が離婚の原因とは言わないが、夫婦間の亀裂を深める引き金になったことは間違いない。

離婚はそれまでに描いた将来像の大幅な変更を迫った。

再就職先が特許事務所ということもあって、一生の職業として弁理士を目指すが、我が国の保育行政の貧しさはこの上なく、運営費稼ぎのバザーに始まり、園庭の草抜き、遂には街頭でのビラ配りまでさせられる始末。今日の出生率の低下は、このような保育行政の貧しさが原因であることを、奥様が働いたことのない政治家や官僚は知る由もないだろう。子供が小学校に入学して若干の余裕ができ、漸く去年弁理士試験に合格できた。２～３年の短期合格者が珍しくない昨今にあって６年も要したのは子供がいたからというのは言い訳に過ぎないが、仕事に関して言えば６年という実務経験だけの実力を備えたかというのは甚だ疑問であり、現在６年の重みを痛感している。子育てについても同じだ。保育所の門で泣いて離れなかったのは昔のこと。今では勝手に一人で学校へ行ってしまう。こんな我が子を見ていると、親子の絆を十分に築かない内に年月が過ぎ去った様で不安にならざるを得ない。せめて受験から開放された今後は、勉強に当てていた時間を子供との触れ合いと仕事に当てようと遅れ馳せながら思っている。

「人生の転機」には何らかの積極的意思が存在すべきだと思うが、私の転機は岐路に立った時に選んだ道がそれまでの進路を変更することになってしまったと言う運命的なものだ。そして選択に際して、自分とは切り離せない存在である子供が重要なファクターになったに過ぎない。

『だれの過去を振り返っても後悔は伴う。鮮やかには生きられなくても正直には生きていける』転機を抑えるよりも前に出会い、その時からずっと私の支えになっている言葉である。